

# 薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第74号

2015年9月

## 第8回柴田フォーラム、昭和大学で開催

編集委員会委員長 西川 隆

日本薬史学会の第8回柴田フォーラムが2015年8月1日(土)午後2時から、塩原仁子氏(理事・昭和大学薬学部)のお世話で会場となった東京品川の昭和大学旗の台キャンパス4号館201号室で、約30名が参加して開かれた。会は折原 裕氏(広報委員長)の進行により進められた。

最初に相見則郎・同フォーラム委員長から開会挨拶が行われ、引き続き①岡 希太郎氏(東京薬科大学名誉教授)の「珈琲一杯の薬理学 コーヒーははじめから薬だった」、②真柳 誠氏(茨城大学文学部教授)の「薬史学による語誌 薬味・カヤクと料理」の順で行われた。両講演とも薬史学研究の立場から興味深い内容で、質疑も活発であった。この後、恒例の懇親会が和やかに行われ、午後6時半過ぎに終えた。

### 講演1 珈琲一杯の薬理学

コーヒーははじめから薬だった

岡 希太郎氏(東京薬科大学名誉教授)

座長の指田 豊先生(東京薬科大学名誉教授)から岡先生の臨床薬理学分野における優れた業績の数々と、最近ではコーヒーの薬理学的研究者として名を馳せていると紹介された。

10世紀ごろにコーヒーは、イエメンの高僧たちの秘薬となり、13世紀半ばには種子(豆)を焙煎して煮出す飲み方が考え出され、16世紀のオスマン帝国では世界最初のコーヒーハウスがコンスタンチノーブルで開業した。

わが国へは『長崎税関録』(1795)に「南蛮人がコーヒーを飲用」という文章が残されていることから、信長の時代に伝来したと考えられている。また19世紀初頭、ロシア艦隊の監視に当たった津軽民兵の多くが「水腫病」で亡くなったが、1855年の派兵では幕府が配給したコーヒーのお蔭か水腫病で死亡する人はいなかったと伝えられている。

明治期には東京上野・黒門町に日本初の喫茶店が開業した後、今日が第三のコーヒーブーム期にあるようだ。そしてコーヒーを毎日飲む人は、飲まない人に比べ肝硬変の罹患リスクが50%以下まで下がるという、2005年の米国消化器病学会誌掲載の論文以来、コーヒーと健康寿命の関係に医師や薬剤師の関心が集まっていると紹介した。

演者はゲノムワイド遺伝子と炎症マーカー解析結果に絞ってコーヒー研究を注視しているが、幅広い立場でコーヒーの歴史から最近の健康問題まで多くのスライドを用いて解説した。

### 講演2 薬史学による語誌 薬味・カヤクと料理

真柳 誠氏(茨城大学文学部教授)

座長の津谷喜一郎先生(日本薬史学会会長・東京大学大学院薬学系研究科客員教授)から演者の真柳先生について、わが国本草学史研究の第一人者であると紹介された。

言うまでもないが、「語誌」とは、言葉の起源や意味、用法などについての変遷を指している。「薬

味」は、もともと中国の学術用語で1世紀の『神農本草経』では〈薬の本質〉として重要な評価基準であったという。わが国では同じような意味で「薬種」と呼ぶ用例が平安時代からあり、江戸時代に至り多用されるようになった。

また「加薬」とは、中国の宋代になって医療が庶民に普及することで、医師が処方箋を書いた後ろに、例えば「生薑しょうが幾片と棗なつめ幾枚を煎じるとき加えなさい」と指示していた。この風習が鎌倉時代にわが国に伝わり、ショウガだけは自分で加えるよ

う「加味薬」、略して「加味」あるいは「加薬」という言葉として定着したと説明した。

これが江戸中期以降は、「具材」も意味するようになり、関西では「かやくご飯」の語源となった。今日ではインスタント麺の具材も「かやく」と呼ばれている。「料理」の語法についても、クックの意味は日本で生まれたという。

こうした薬味・加薬・料理の語誌について、多くの資料を用いて明解に説明した。

## 韓国の薬学創立100周年記念行事へ出席して

名誉会員 奥田 潤

韓国では、最初の薬学教育施設である朝鮮薬学講習所が、1915年6月12日に設立されたのを記念して、2015年6月12日に韓国ソウル大学薬学部において、薬学創立100周年の記念行事が行われた。

本来ならば津谷会長が出席されるどころ、都合で出席されず、筆者が代理で招待され出席した。当日10時より薬学部内新薬開発センター講堂で、ソウル大学薬学部長 Bong-Jin LEE教授（タンパク質のNMRの専門家）の開会の挨拶があり、ついで韓国薬剤師会会長 Chan Hwi CHO氏、韓国薬学教育協議会会長 Beom-Jin LEE氏、韓国薬学会会長 Uy Dong SOHN氏の祝辞があった。

ついで、10時20分より記念シンポジウムがあり、韓国薬学史分科学会会長・ソウル大学名誉教授 Chang-Koo SHIM氏による「韓国薬学教育の歴史-I」と題しての講演があり、その後、大韓民国学術院会員・ソウル大学名誉教授 Sang Sup LEE氏により「問題-II」と題し、古い記念写真の数々が披露、説明された。

午後には、津谷会長が作成され、会長と筆者が署名した祝辞を読み上げた。ついで筆者が「日本の薬学教育、過去、現在、そして未来へ」と題し講演した。内容は日本の薬科大学薬学部74校の設立の経緯と6年制薬学教育の現状について述べ、薬剤師国家試験の成績について説明した。近い将来への課題とし

て、社会についてより深く理解し、患者に対し人間性のより豊かな薬剤師、薬学研究者を育てるために、物質薬科学と共に“人文社会薬学”を薬学生に教えることが重要であり、そのためには薬学を哲学する心が必要であると結んだ。その後、Eun Bang LEE ソウル大学名誉教授による「ソウル国立大学天然物研究所の歴史」、Byong Kak KIM ソウル大学名誉教授による「近代薬学研究における進歩」という発表があり、記念シンポジウムは終了した。

16時より100周年を記念して設立された岾山(Gasan)薬学歴史館の開館式が薬学部正面玄関前で行われた（出席者150名ほど）。同館は薬学正面玄関奥にあり、およそ10m×25mの広さがあり、資料が全てガラスケースに入れられ韓国語で説明がつけられていた。筆者にとって興味があったのは京城薬学専門学校の校長であった玉虫雄蔵先生の海軍薬剤少将の軍服姿の写真を見つけたことで、同先生はその後名城大学薬学部の初代学部長を務められた。

帰路、列車で慶州へ行き、国立博物館で等身大の薬師如来立像（国宝、金銅像）を拝観できたことは大きな喜びであった。

今回の韓国薬学100周年の記念行事で御厄介になった B.J. LEE薬学部長、C.K. SHIM, S.S. LEE両ソウル大学名誉教授に厚く御礼申し上げる。

<http://www.snupharm.ac.kr/korean/about/history.asp>

## 津谷喜一郎先生の記念祝賀会（報告）

編集委員 小清水 敏昌

本学会会長・津谷喜一郎先生の東京大学薬学系研究科特任教授退任と東京有明医療大学就任の記念祝賀会が2015年7月11日（土）、約200名が出席して東京麻布の国際文化会館で開かれた。会場ではフルート、ファゴット、ピアノの女性演奏者による演奏が行われており、華やかな雰囲気醸し出していた。

会は、五十嵐中先生（東京大学医薬政策学助教）の司会で進められ、冒頭、津谷先生のご親戚の東京藝大卒の花柳瑞優萌さんが、御祝儀舞 清元 青海波を舞った。嶋田一夫教授（東京大学薬学系研究科長）と佐藤達夫先生（東京有明医療大学学長）の祝辞の後、乾杯・歓談に移った。

薬史学会からは三澤美和、相見則郎、J. ヨング、森本和滋、黒川達夫の各先生らが参加しており、また祝賀会の世話人として山川浩司、宮本法子の両先生のお名前があった。

歓談途中の祝辞では、WHO で一緒に仕事をされた新福尚隆先生（神戸大学名誉教授）、EBM実践者の名郷直樹先生、乳がん患者アイデアフォー世話人中沢幾子氏、前消費者庁長官 阿南久氏などが懐かしい話を述べた。

最後に津谷先生が謝辞を述べられた。「振り返ってみると、東京医科歯科大学難治疾患研究所において日本で最初の臨床薬理学講座を立ち上げられた恩師の佐久間昭先生から学んだ『評価する』ことを医薬品のみならず幅広い領域で展開してきた。現在、日本薬史学会の会長をしており、これまで取り組んだ薬効評価の歴史をまとめてみたいと考えている」と締め括られた。

なお津谷先生は東大では客員教授として、新規の大学では特任教授として指導にあたられる。

会の詳細は <http://www.f.u-tokyo.ac.jp/~utdpm/>

### 中部支部だより

## 日本薬史学会・中部支部講演会案内

日本薬史学会中部支部長 河村 典久

日本薬史学会中部支部例会を下記の要領で開催しますので、会員の皆さんのご参加をお願いいたします。

日 時：2015年12月5日（土）14：00～16：00

場 所：名城大学名駅サテライト・多目的室  
（名古屋市中村区名駅3-26-8 名古屋駅前桜通りビル13階）

名古屋駅ユニモール地下街④番出口を出てすぐ『名城大学名駅サテライト』で検索してください。

講演会 14：10～

演題1：演題は未定

森田宏（内藤記念くすり博物館）

演題2：「三重の本草学者・丹波修治」

○河村典久（中京大学 人工知能高等研究所  
元金城学院大学）

日本薬史学会・中部支部事務局 飯田耕太郎

名城大学薬学部

〒468-8503 名古屋市中村区八事山150

TEL：052-839-2710（直通）FAX：052-834-8090

E-mail：iida@meijo-u.ac.jp

## 日本薬史学会2015年会(奈良)をめぐる薬史探訪(お知らせ)

日本薬史学会関西支部 事務局長 宮崎 啓一

今年の年会は、村岡 修関西支部長を年会長とし、日・中・韓 国際薬史フォーラム / 日本薬史学会 2015 年会(奈良)として、11月21日(土)、奈良春日野国際フォーラム 薨～I・RA・KA～(旧・奈良県新公会堂)で開催します。翌22日(日)は三光丸クスリ資料館、宇陀市歴史文化館「薬の館」、さらに法相宗大本山 薬師寺を参拝するなどの薬史ツアーを企画しました。筆者ら年会実行委員有志4名は8月某日、下準備を兼ね、関連施設を含めた薬史蹟探訪にあたりましたのでご紹介します。

年会会場“奈良春日野国際フォーラム 薨”は、近鉄奈良駅より鹿に追尾されながら東大寺大仏殿方向に向かうこと徒歩約20分のところにあります。ここでは口頭発表、シンポジウムおよび市民公開講座の会場として能楽ホールを、ポスター会場として会議室を、また懇親会場としてレセプションホールを使用します。重厚感のある素晴らしいホールです。

2階からは庭園が望めます。年会開催時の晩秋にはイチョウやかえでなどの紅葉や落ち葉を楽しむことができます。鹿が侵入して荒らされることのないよう周囲に防護柵が張りめぐらされていますので、柵に近づいて感電することがないようにご注意ください。

まほろば大和は、古事記や日本書紀の時代か

ら薬や医療に深くかかわってきました。古代に始まり、推古天皇の薬獵くすりがり、修験道の開祖として知られる役小角えんのおづねの薬草木や金属鉱物の利用、寺院における薬草栽培と製薬、また薬の配置販売など近現代に至る大和を“くすり”というキーワードを抜きにしては語れません。

薬史ツアーで訪問予定の三光丸クスリ資料館では、三光丸のみならず、とくに和漢薬をめぐる大和の歴史を鳥瞰します。次の宇陀市歴史文化館「薬の館」は、江戸時代末期の建築とされる薬種問屋の旧細川家住宅を改修した歴史文化館です。ここには大宇陀町の町の史料、藤沢薬品工業(現在のアステラス製薬)や当家ゆかりのものが展示されています。

初日のシンポジウムで話題提供される森野旧薬園は、当館に比較的近いところにあります。11月は時節柄、植生を考慮すると園内の見学には不向きな時期ですので、今回は入園せずに、その所在を確認する程度に留める予定です。

昼食は、薬草料理で知られる大願寺の薬膳料理が楽しみです。当寺院の料理を食した当年会実行委員会委員の先生からも好評を博しています。

午後からは法相宗大本山 薬師寺を参拝します。当寺院は奈良西ノ京町に建立された南都七大寺のひとつで、1998年にユネスコ世界遺産に登録されました。



能楽ホール(1階)



レセプションホール(2階)



2階より庭園を望む



薬の館から森野旧薬園までの町並み  
(重要伝統的建造物群保存地区)



森野旧薬園



森野旧薬園から望む大宇陀の町並み



大願寺山門

今回当寺院では、薬史ツアーのタイミングで期間限定公開の平山郁夫画伯のシルクロード『大唐西域壁画』を鑑賞する機会に恵まれます。この作品は当寺院内の玄奘三蔵院伽藍に所蔵されております。年会開催協力者で当寺院と所縁の深い奈良県製薬協同組合加盟会社の方の話ですが、この壁画を鑑賞するだけでも同寺院を参拝した価値は十分であると絶賛しています。

また、当寺院ではツアー参加者全員に般若心経の写経を予定しています。写経は墨または鉛筆を使用し、当寺院で永久保存されます。後の参拝時には閲覧を申し出ることもできますの

で、写経を行うことは同寺院参拝の記念にもなります。

薬師寺近隣には医僧としても知られる鑑真和上ゆかりの唐招提寺があります。薬師寺門前には蕎麦切り“よしむら”というお蕎麦屋さんがありますが、今回の薬史ツアーとは別な機会に譲りたいと思います。

どうか会員諸氏の皆さま、普段では味わえない奈良の良さを知っていただく企画になっております薬史ツアー、当年会事務局および実行委員会委員一同、奈良の地で多くのご参加をお待ちしております。



世界遺産 薬師寺の石碑



玄奘三蔵院伽藍・大唐西域壁画のご案内

# 継承される生薬標本の意義： 生薬の国際標準化と薬物文化

大阪大学総合学術博物館・准教授 高橋 京子

大阪大学には1920-50年代にかけて蒐集された国内外の製薬企業や研究所製の生薬標本類が多く所蔵されている。

これら標本類は、実地医療で品質が担保された証拠となる実体物である。当時最新の医薬品であり、日本の医学・薬学教育の教材や研究材料として、大学が購入・保存してきた。例として、中尾万三・木村康一東アジア標本(310点)、独逸メルク社製欧州標本(281点)、米国イーライリリー社製標本(216点)及び生薬・漢方研究のため創設された津村研究所製標本類(236点)が挙げられる。

それらは生薬学者(朝比奈泰彦 他)により監修された医薬品原料であることから、医療文化財研究でも、基原生物が明確な比較資料として、過去に正倉院薬物や緒方洪庵の薬箱研究に活用されてきた。

2008年、中国が Traditional Chinese Medicine (TCM)の標準化を国際標準化機構(International Organization for Standardization: ISO)に申し入れたことがきっかけで、中国伝統医学が大きく取り上げられるようになった。

標準化は『何を基準とするか』が重要である。中国は歴史的起源を根拠に自国の生薬基準を国際標準にすることを主張しているが、中華人民共和国樹立に至る戦乱やその後の文化大革命により、中国の医療文化財および戦前の日中文化事業による薬用資源研究の学術成果が離散・紛失した事実が検証されていない。

その一方で、我国には1900年代初頭のアジア及び欧州の生薬標本が現存しており、大阪大学はその典型的施設である。

経験知に基づく漢方医学においては、過去の生薬標本はその時代に用いられた高品質生薬そのものであり、病態や治療記録を記した医療文献(古文書)は当時の漢方処方方の臨床応用におけるエビデンスの蓄積に他ならない。また、幕末には欧米より医学が『蘭方』として移入し、それに伴い多くの欧米で用いられる薬用植物の知識も導入された。

現在も日本で使い続けられる生薬は、歴史の中で様々な生薬が淘汰された結果、残ったもの、即ち日本人の体質に適した有用な生薬であると考える。

## 日本薬史学会編集委員会

編集委員長：西川 隆

編集委員：荒木 二夫 小清水敏昌 砂金 信義 ヨング・ジュリア

## 薬史レター 第74号 2015年9月

編集人：西川 隆 発行人：津谷喜一郎

日本薬史学会 The Japanese Society for History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (助学会誌刊行センター内) 日本薬史学会事務局

tel: 03-3817-5821 fax: 03-3817-5830 e-mail: yaku-shi@capj.or.jp <http://yakushi.umin.jp>